

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381207

研究課題名(和文) 教科や科目の分化と統合を視点とする小・中・高を通じた社会系教育カリキュラムの研究

研究課題名(英文) Examination of Elementary and Secondary Social Studies Curricula from the Perspective of Differentiation and Integration of School Subjects

研究代表者

山田 秀和 (YAMADA, Hidekazu)

岡山大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：50400122

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、教科や科目の分化と統合を視点にして、小・中・高を通じた社会系教育カリキュラムの編成原理を総合的に究明することにある。本研究の成果は以下の通りである。第一に、社会系教科と他教科領域の「教科レベルの統合」、社会系教科内での「科目レベルの統合」、そして「科目レベルの分化」を枠組みにして、それぞれのカリキュラムや授業の形態を分析・検討したことである。第二に、以上を踏まえて、小・中・高を通じた社会系教育カリキュラムのあり方について考察したことである。

研究成果の概要(英文)：This study explores elementary and secondary social studies curricula from the perspective of differentiation and integration of school subjects. I examined examples of curricula and lesson plans in the United States and Japan, based on three types of curriculum frameworks. The first one is the integration of social studies and other subject areas, such as literacy (ELA); the second one is the integration of some subjects within social studies, for example, history and civics; and the third one is the complete differentiation of subjects. Based on the analyses of the examples, I examined the progression from elementary to secondary levels. The results demonstrate various ways to design social studies curricula and lesson plans.

研究分野：社会科教育学

キーワード：社会科 社会系教育・社会系教科 分化と統合 小・中・高 カリキュラム 授業構成 アメリカ

### 1. 研究開始当初の背景

本研究に着手した背景には、以下のような状況があった。

第一に、教科横断的で汎用的なコンピテンシーやリテラシーの育成が求められるようになり、教科や科目の境界線が問われていたことである。このような動きは世界的なものであり、日本の社会系教科においても、教科や科目の枠組みをあらためて考察する必要が出てきた。そこで本研究では、教科や科目の分化と統合を視点にして社会系教育カリキュラムの編成原理を究明しようと考えた。

第二に、小・中・高の学校教育全体における社会系教育の位置づけが問われていたことである。日本の社会系教育は、小中の社会科と高校の地理歴史科・公民科で教科が異なっているように、そのつながりや系統性が見えにくい。筆者は、これまでの研究にて、アメリカの社会科に手がかりを求めて、歴史教育の小・中・高の段階性・発展性を模索してきた。その過程で、他の社会系教科目や他教科との関係に踏み込んだ分析の必要性を感じるようになった。本研究は、視野を広げ、教科や科目の分化と統合に着眼点を置く。その上で、「小・中・高の学校教育全体の中に、社会系教育をどのように位置づければよいのか？」という問いを設定した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、教科や科目の分化と統合を視点にして、小・中・高を通じた社会系教育カリキュラムの編成原理を総合的に究明することにある。

従来、分化と統合といえば、地理、歴史、公民（政治、経済、社会、倫理等）の位置づけをめぐる議論が中心であった。しかし、本研究で着目するアメリカに多く見られるように、近年、他教科領域との統合に関する議論も広く展開されている。以上を踏まえて社会系教育のあり方を原的に示すならば、社会系教科と他教科領域の「教科レベルの統合」、社会系教科内での「科目レベルの統合」、そして「科目レベルの分化」の三つの形態が想定され、そのもとで多様な社会系教育のカリキュラムが編成されることになる。

本研究では、これらの分析・検討を通して、小・中・高の学校教育全体の中に社会系教育をどのように位置づければよいのかを探索する。

### 3. 研究の方法

本研究の手順は、以下の通りである。

第一に、文献や資料の収集・分析を通して、教科や科目の分化と統合のパターンを典型的に整理し、分析枠組みを設定する。ただし、細かなタイプの整理に関しては、個々の事例の分析と同時並行的に進める。

第二に、文献や資料に基づいて、教科レベルの統合カリキュラムの編成原理、科目レベルの統合カリキュラムの編成原理、科目レベ

ルの分化カリキュラムの編成原理をそれぞれ解明する。

第三に、上記の分析結果を踏まえて、分化と統合を視点とする小・中・高を通じた社会系教育カリキュラムの編成原理を総合的に解明する。

なお、本研究においては、教科レベルの統合に関する考察を中心に行った。教科レベルの統合は、教科の枠組みや性格に関わる大きな関心事だからである。またそれは、コンピテンシーやリテラシー等の教科横断的で汎用的な資質・能力の育成という現代的な課題と関連するものでもある。

さらに、本研究では、体系的なカリキュラムの編成原理よりもむしろ、授業構成に焦点を当てて分析した事例も多い。より具体的で実践的な考察を重視した。

### 4. 研究成果

本研究では、「教科レベルの統合」「科目レベルの統合」「科目レベルの分化」を枠組みにして分析を行った。「科目レベルの統合」と「科目レベルの分化」については、対比的に考察を行った。それらを踏まえて、小・中・高のカリキュラムのあり方を探った。以下、それぞれについて概説する。

#### (1) 「教科レベルの統合」に関する考察

社会系教科と他教科領域を統合するカリキュラムについて、本研究では、アメリカに手がかりを求めて二つの方向性を分析した。第一は、社会科と全教科領域の統合であり、第二は、社会科と特定教科領域の統合である。それぞれに分けて説明したい。

##### 社会科と全教科領域の統合

このカテゴリーでは、二つのタイプのカリキュラムを分析した。

一つ目は、「社会科の教育内容を基盤にした統合カリキュラム」である。

このカリキュラムは、厳密に言えば社会科というよりも総合学習に近いが、ここでは、最も統合が進んだ社会科の一つの形態と見立てて、分析を行った。

手がかりにしたのは、R. フォガティと J. ストアーによるカリキュラム統合論である。

フォガティらは、ガードナーの多重知能理論を導入するなど、様々な観点から統合カリキュラムのあり方を論じている。

この研究では、フォガティらの文献から、高等学校段階の事例である「黒死病の時代の中世ヨーロッパ」を取り上げて授業構成を分析した。この授業には、NCSS の社会科スタンダードを筆頭に、言語教科のスタンダード、音楽のスタンダードの対応部分が記されている。授業は、黒死病の時代の中世ヨーロッパという社会科の学習内容を中心にして、音楽や数学、保健、理科など、様々な領域の学習へと派生するように構成されている。

この事例から導かれた授業構成の基本原

理は、以下の通りである。( )教科の枠組みを前提にして、共通のテーマから関連領域を派生させて授業を構成する。( )広領域にわたる授業を、様々な知能の活用の観点で踏まえて構成する。

このモデルは、広領域にわたる知識やスキル、能力を育成するための社会科カリキュラムの可能性を示すものである。ただし、このような統合カリキュラムには、以下のような検討すべき課題も見られた。( )広領域にまたがるがゆえに、一つの単元や授業の中での一貫性が保ちにくいこと。( )様々な領域にわたるスキルや能力は鍛えられるが、知識内容の掘り下げが浅くなる可能性があること。

社会科と全教科領域を統合するカリキュラムの二つ目は、「社会科を中核にした統合カリキュラム」である。

このカリキュラムは、先の「社会科の教育内容を基盤にした統合カリキュラム」よりも社会科という教科の枠組みをより重視したものになっている。

手がかりにしたのは、T.リンドキストとD.セルウィンのカリキュラム統合論である。

リンドキストらは、社会科を学校の教科におけるハブとして位置づけている。また、他教科との統合的な学習により、相乗効果が生まれると考えている。そして、中心的なテーマや概念に基づく学習を提案している。

この研究では、リンドキストによる初等用の連続する二つの単元「世界への窓」「グローバル村、グローバルな展望」をもとに分析を行った。「世界への窓」は、世界地理や世界文化の認識を高めることをねらいとしている。「グローバル村、グローバルな展望」は、グローバル 이슈に気づき、分析し、解決策を求め、それぞれの考えを表現することをねらいとし、地理的環境と人々の生活の関係やグローバル 이슈への理解を深めさせるように計画されている。

この事例から導かれた授業構成の基本原則は、以下の通りである。( )社会科学学習の中軸をテーマや概念の理解に設定し、それを効果的に達成するために他教科領域のスキルの活用を組み込む。( )他教科領域を、それぞれの内容よりもむしろ、主題に関する深い考察を促すための方法(手段)としての面を重視した形で統合し、学習を組織する。

このモデルは、社会科のテーマや概念の理解という目標・内容の明確化と、方法における広領域化を基本原則とすることで、概念の効果的な習得を促すとともに、言語や音楽、美術等の領域にまたがる多重知能の発達を促進しようとするものである。ただし、このような統合カリキュラムには、以下のような検討すべき課題も見られた。( )授業の一貫性と領域的な広がりとのバランスをどのようにとればよいのが明確でないこと。( )社会科の概念的な理解には有効であるが、他教科領域の要素の多くがスキルに解消され

がちであること。

#### 社会科と特定教科領域の統合

このカテゴリーでは、社会科と言語教科領域の統合に焦点を当てて、カリキュラムの分析を進めた。アメリカでは、コモン・コア・ステート・スタンダード(2010)の登場以来、社会科においてもリテラシーの育成が一層求められるようになった。これは、言語教科が主として担ってきたリテラシーの育成に社会科も積極的に関与することを意味している。

このような状況にあるアメリカの事例を取り上げて、以下に示すような二つの視点からの研究を行った。

第一は、社会科におけるリテラシー教育の統合方法についての分析である。ここでは、アメリカの事例を手がかりにして、次の三つの類型を仮説的に示した。

( )「内容関連型」=リテラシー教育を社会科の内容面で関連づけ、統合を図るもの。これは、社会的な題材を用いて、社会科の学習とともに「読むこと」等の幅広い言語スキルの学習を組織するものである。

( )「方法関連型」=リテラシー教育を社会科の方法面で関連づけ、統合を図るもの。これは、社会科の枠組みを重視し、社会科の学習方略に適合したリテラシーを選択することで、統合を行うものである。

( )「目標関連型」=リテラシー教育を社会科の目標面で関連づけ、統合を図るもの。これは、民主主義社会の形成・発展に向けた資質・能力を育成するという目標のもとで社会科とリテラシー教育の統合を行うものである。

また、以上の分類の典型となる授業の構成を分析し、それぞれの特質を整理した。そして、後者の類型のものほど、社会科の理念を重視し、社会への関わりや社会の形成に必要な資質・能力の育成に重きを置いていることを見出した。

第二は、社会科とリテラシー教育の統合による市民性育成についての分析である。リテラシー教育を統合することで、どのような市民性を育成することができるのかを探求した。特に、コモン・コア・ステート・スタンダードに対応したアメリカの二つの事例を比較検討し、以下のような方向性の異なる市民性育成についての考え方を引き出した。

( )「社会の複雑な文脈を読み解く」ことを重視するもの。このタイプでは、社会の複雑な文脈を読み解けることが、市民としての重要な資質だと考えられている。

( )「社会を批判的に読み解き、変革する」ことを重視するもの。このタイプでは、テキストを批判的に読み解き、変革の方法を思考できることが、市民としての重要な資質だと考えられている。

この違いを明確にするために、授業構成の分析もあわせて行った。

以上のような研究により、体系的な整理とまではいかなかったものの、教科レベルの統合を具体化する様々な方法・モデルが示唆された。

### (2) 「科目レベルの統合」と「科目レベルの分化」に関する考察

社会系教科内での科目レベルの統合と分化に関しては、主に、学習指導要領改訂に関する議論に重ねて、日本の事例で考察を進めることにした。

ここでは、総称として位置づけられた「社会的な見方・考え方」と、「社会的事象の地理的な見方・考え方」「社会的事象の歴史的な見方・考え方」「現代社会の見方・考え方」のような領域固有の見方・考え方の関係を切り口に分析を試みた。

特に、地理を例にして、領域固有性に重点を置くアプローチと、領域横断性に重点を置くアプローチの違いを明確にしようと考えた。前者は、科目レベルの分化を意識したアプローチであり、後者は科目レベルの統合を意識したアプローチとなる。

具体的には、二つの違いを、中学校の瀬戸内工業地域の授業を事例にして考察した。

領域固有性を重視するアプローチの場合は、以下ようになる。まず、地理的な見方・考え方、すなわち地理ならではの視点を意識して問いを立てる。たとえば、「なぜ瀬戸内工業地域が発展したのか？」などである。この問いを海運や地理的条件との関係で考察する。特に「位置」や「場所」に関わる地理的な視点を重視して問いに迫る授業となる。

領域横断性を重視するアプローチの場合は、以下ようになる。まず、社会的な見方・考え方を構成する様々な視点を意識して問いを立てる。たとえば、「なぜ水島コンビナートの石油企業や石油化学企業は事業連携や統合を進めているのか？」などである。この場合は、経済的な「効率」の視点を重視して問いに迫る授業となる。地理というよりは公民の授業に近い。領域を積極的にまたいで構成される授業となる。

以上の考察により、科目レベルの分化と科目レベルの統合のそれぞれの型のアプローチを具体化する方法・モデルが示唆された。

### (3) 小・中・高を通じたカリキュラム編成に関する考察

本研究は、(1)(2)に関する事例の分析に時間をかけたため、小・中・高の連続性については十分に踏み込めていない。けれども、学習指導要領改訂の議論に重ねて、以下の二つの視点から研究を進めた。

第一は、領域固有性を重視した小・中・高のカリキュラムと領域横断性を重視した小・中・高のカリキュラムについての考察である。これは、科目レベルの分化と科目レベルの統合のそれぞれの型を基盤にして構成

される小・中・高のカリキュラムのあり方を検討したものである。歴史教育を事例にして対比的に概説すると以下ようになる。

領域固有性を重視した小・中・高のカリキュラムでは、たとえば「変化」という視点に着目して、次のような段階性を想定することができる。小学校では、主に事象の変化の過程を明らかにする。中学校では、視野を広げ、時代の変化の過程を分析することに重点化する。高等学校では、変化の要因・理由を含めて総合的に事象や時代に迫ることを重視する。ここでは具体的な学習の例は考察していないが、歴史の知識や技能を系統的に発展させることに重きを置いた小・中・高のカリキュラムが想定される。

それに対して、領域横断性を重視した小・中・高のカリキュラムでは、他領域の視点に着目して、次のような学習を想定することができる。たとえば、小学校の歴史学習で自由民権運動を「民主主義」や「対立と合意」のような公民領域の視点で学習し、中高でそれらに関する概念を一層深めていくような学習である。ここでは、様々な領域の知識や技能を幅広く発展させることに重きを置いた小・中・高のカリキュラムが想定される。

以上の考察により、分化型と統合型のそれぞれの小・中・高カリキュラムを具体化する方法・モデルが示唆された。

第二は、領域固有性を重視するアプローチと領域横断性を重視するアプローチを組み合わせた小・中・高のカリキュラムの考察である。これは、科目レベルの分化と科目レベルの統合の二つの型を連続させて構成される小・中・高のカリキュラムのあり方について検討したものである。

ここでは、瀬戸内工業地域を事例にして、次のような段階性を構想した。小学校の地域学習では、地理的な「分布」や「地域」などの視点から、水島や児島の工業立地や原料・製品の空間的な広がりを調べる。中学校の地理的分野では、地理的な視点だけではなく、経済的な「効率」の視点などから、なぜ近年、コンビナートを構成する複数の石油企業や石油化学企業が事業連携や統合を進めているのかを探る。高等学校の地理では、さらに公民領域の視点を活用して、今後の工業地域や産業について考える。この事例は、一般的な考え方とは異なり、小・中・高を通じて徐々に分化型から統合型の学習へと移行する構成となっている。

以上の考察により、分化型と統合型を組み合わせた小・中・高カリキュラムを具体化する方法・モデルが示唆された。

本研究は平成 30 年 3 月までの四年間の研究課題であったが、より発展的に再構築した研究課題が「研究計画最終年度前年度の応募」に採択されたため、平成 29 年 4 月以降、学力形成論に本格的に踏み込んだ理論的・実践的研究へと引き継がれることになった。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

山田秀和「社会的な見方・考え方を成長させる学習課題の切り口-地理-:『地理』を意識したアプローチと『社会科』を意識したアプローチ」『社会科教育』No.697, 明治図書, 2017, pp.12-13, 査読無

山田秀和「小学校 中学校 高等学校の流れの中での社会系教科の内容の枠組み-『3つの窓』を通じた社会生活の理解・社会認識-:総合的・発展的に社会を読み解く学習を」『社会科教育』No.695, 明治図書, 2017, pp.48-51, 査読無

山田秀和「『社会的な見方・考え方』を視点にして小中高の社会系教科の系統性を考える」『小学校社会科・地図 NEWSLETTER』第2号, 東京書籍, 2016, pp.6-7, 査読無

山田秀和「社会科の教育内容を基盤にした統合カリキュラムに関する一考察-フォガティ&ストア-の所論を手がかりにして-」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第161号, 2016, pp.59-68, 査読無  
([http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/5/54233/20160528123825242145/bgeou\\_161\\_059\\_068.pdf](http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/5/54233/20160528123825242145/bgeou_161_059_068.pdf))

山田秀和「社会科における言語活動の充実への取り組みから見えるもの」『東書Eネット』, 東京書籍, 2015, web掲載, 査読無  
([https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/ten\\_download/dlf80/esdf1865.htm](https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/ten_download/dlf80/esdf1865.htm))

山田秀和「社会科を中核にした統合カリキュラムに関する一考察-リンドキスト&セルウィンの所論を中心に-」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第158号, 2015, pp.103-114, 査読無  
([http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/5/53155/20160528122712261728/bgeou\\_158\\_103\\_114.pdf](http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/5/53155/20160528122712261728/bgeou_158_103_114.pdf))

[学会発表](計2件)

山田秀和「社会科とリテラシー教育の統合による市民性育成-アメリカにおける授業論を比較考察して-」全国社会科教育学会第65回全国研究大会・社会系教科教育学会第28回研究発表大会合同研究大会, 2016年10月8日, 兵庫教育大学

山田秀和「社会科におけるリテラシー教育の統合方法-アメリカの取り組みを類型化して-」全国社会科教育学会第64回全国研究大会, 2015年10月11日, 広島大学

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 秀和 (YAMADA, Hidekazu)  
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授  
研究者番号: 50400122